

# 南コーカサス地方のネアンデルタール人

## —アゼルバイジャン第16次発掘調査(2025年)—

西秋 良宏 東京大学総合研究博物館教授  
アザド・ゼイナロフ アゼルバイジャン考古学人類学研究所主席研究員  
ヤコブ・ママドフ アゼルバイジャン考古学人類学研究所上級研究員  
ウルビヤ・サファロヴァ アゼルバイジャン考古学人類学研究所研究員  
久米 正吾 東京大学総合研究博物館学術専門職員  
王 媛 東京大学総合研究博物館特任研究員  
新井 才二 東京大学人文社会系研究科助教  
畠山 駿 東京大学人文社会研究科修士課程  
仲田 大人 青山学院大学文学部講師

## Neanderthals in the Southern Caucasus: The 2025 Investigations at the Middle Palaeolithic Cave of Taglar, Azerbaijan

NISHIAKI, Yoshihiro Professor, The University of Tokyo, Japan  
ZEYNALOV, Azad Leading Researcher, Institute of Archaeology and Anthropology, Azerbaijan  
MAMMADOV, Yagub Senior Researcher, Institute of Archaeology and Anthropology, Azerbaijan  
SAFAROVA, Ulviya Researcher, Institute of Archaeology and Anthropology, Azerbaijan  
ARAI, Saiji Research Associate, The University of Tokyo, Japan  
HATAKEYAMA, Shun Graduate Student, The University of Tokyo, Japan  
KUME, Shogo Project Academic Specialist, The University of Tokyo, Japan  
WANG, Yuang Project Researcher, The University of Tokyo, Japan  
NAKATA, Hiroto Lecturer, Aoyama-Gakuin University, Japan

### 1. はじめに

2025年8月、アゼルバイジャン、タグラル洞窟の第3次現地調査を実施した。2023年の予備調査、2024年の発掘開始をへて、より本格的な調査となった。調査の目的は、南コーカサス地方におけるネアンデルタール集団の到来、展開、サピエンス集団との交替のプロセスを調べることである。

ネアンデルタールはハイデルベルゲンシス末裔の一集団として、約30万年前のヨーロッパ大陸で誕生した。その後、アジアにまで分布域を広げた際、障害となったのが黒海とカスピ海である。したがって、彼らは、その北部、もしくは南部を通して東に向かった。北の回廊はウラル山脈の南をへて中央アジアにつながり、最終的にネアンデルタールたちは約4万年前、東北アジアにまで到達した。一方、南の回廊は中央アジアへの東漸と西アジアへの南下の分岐点でもあった。南下した集団はアフリカから北上するサピエンス集団と最初の交雑を経験した。

こうしてみると、アゼルバイジャンはコーカサス南

回廊の分岐点に位置する。中期旧石器時代の文化堆積を豊富に残すタグラル洞窟は、ヨーロッパからのネアンデルタール人進出と展開を調べるうえで格好の遺跡なのである。

さて、本稿のタイトルには第16次調査と掲げている。これは2008年におこなった筆者らの最初のアゼルバイジャン現地調査の年から数えたものである。コロナ禍の2020、2021年に中断した以外は毎年、現地調査を実施してきた。その大半は新石器時代、つまりコーカサス地方への農耕牧畜の拡散を調べる研究を主眼としていたが、近年はネアンデルタール人研究へのシフトをすすめてきた。新石器時代の開始に関わる研究が一定の成果をあげたことに鑑み(Nishiaki 2025)、東京大学が1960年代から続けてきた西アジアにおける人類進化研究をアゼルバイジャンにて継続する舞台が整ってきたからである。2016-2022年に調査したダムジリ洞窟は、中石器時代～新石器時代の移行を跡づけた画期的遺跡であったが、ネアンデルタール人文化層の存在を示したことも耳目をひいた(図1; Nishiaki et al. 2025a; Aliyeva and Nishiaki 2025)。また、2023



図1 タグラル洞窟と関係遺跡の位置。



図2 タグラル洞窟の全景。左下に、新たに設置された遺跡解説プレートが見える。

年にはダムジリ洞窟近傍のネアンデルタール人遺跡として知られていたダシュサラフル洞窟の再発掘を実施した(西秋ほか 2025; Nishiaki et al. 2025b)。

今回のタグラル洞窟の発掘は、以上の背景をふまえて開始したものである。2025年の現地調査は8月9日から29日まで実施した(図2)。

## 2. タグラル洞窟について

この洞窟は、アゼルバイジャン南部、ホジャヴェンド県に位置する。小コーカサス山麓部、標高は約710 m、アラクス川の支流の一つであるクルチャイ川が南を東西に流れる。その河床との比高は約35 mである。

アゼルバイジャンにおける旧石器時代の本格的調査は1950年代に始まった。1956年のダムジリ洞窟発掘を皮切りに調査が進展し、クルチャイ川流域にあるアズフ洞窟とタグラル洞窟が1960年に発見された。どちらも発見者はM. フセイノフであり大規模な発掘調査が繰り返された。アズフ洞窟では最下層からはオ

ルドワン文化を彷彿とさせる石器群を有する文化層、上層ではハイデルベルゲンシスの化石人骨が発見されるなど前期旧石器時代を中心に成果があがった。一方、タグラル洞窟では分厚い中期旧石器時代の文化層が見つかった。すなわち、これら二つの洞窟遺跡は南コーカサス地方における人類進化、旧石器文化の発展を語るのに欠かせない定点を提供する(Zeynalov et al. 2025a; 西秋 2025)。

タグラル洞窟の発掘は1977年からA. ジャファロフが引き継ぎ、1986年まで続いた。6 mにおよぶ中期旧石器文化層の発見は、コーカサス地方において初めてのことであった。この洞窟は、全部で六つのチェンバーからなるカルスト洞窟である。考古学的堆積は、その東端に位置する幅8 m、奥行き10 mほどのチェンバーで見つかった(図2)。中期旧石器時代文化層は厚さ数十センチに満たない完新世層直下に位置し、第2~6層に分けられた。最下層は、南コーカサス地方におけるネアンデルタール人到来の時期や、その後の文化進化を定める上で、きわめて重要である。また、重層的な文化層は、その後の彼らの文化、適応の変遷を明らかにする材料となる。さらに言えば、第2層は、当初の報告では中期旧石器時代とされたにもかかわらず(Jafarov 1983)、後の論考では後期旧石器時代とされており(Jafarov 2017)、解釈が揺れている。旧人新人文化層が層位的に見つかった例はアゼルバイジャンでは未見であるから、その実態を定めることは交替劇研究の観点からきわめて重要である。

## 3. 日本チームのタグラル洞窟発掘

ソビエト時代の発掘は洞内堆積の2/3におよんだというが、私たちは2023年の予備調査によって未発掘の堆積物が洞内の東壁側、そして洞口部テラスに十分、残っているという見通しを得た。そこで、2024年には東壁際に1 m幅の南北トレンチを設けて発掘を開始した(Nishiaki et al. 2025c, d; 西秋 2025; 西秋ほか 2025)。その結果、岩盤は洞奥から洞口に向けて急傾斜していることが確認された。すなわち、かつての発掘は洞奥部では岩盤に到達していた一方、洞口部以南ではさらに豊富な文化堆積が残存していることがわかった。

そこで2025年の発掘においては、次の発掘をおこなった(図3; Zeynalov et al. 2025b)。

(1) 第2・3層: 洞奥部東側にはタグラル洞窟における中期・後期旧石器時代の移行を理解するに欠かせない



図3 タグルアル洞窟の発掘区。洞奥から洞口を見る。左が東壁。



図4 タグルアル洞窟第4層の炉跡。手前には露出した岩盤が見える。

第2・3層が残存していると考えられたため、1m幅のトレンチを南北に2m、拡張した。出土物の大半は動物骨の破片であった。旧石器時代当時の洞奥では天井高が地表から1mもなかったはずである。日射が十分に届かなかったことを鑑みれば、居住空間と言うよりはゴミ捨て場のような場所であったと思われた。ただし、第2層の石器も若干、回収できたから、タグルアル洞窟に後期旧石器文化層があったかどうかという問題を解決できるという見通しを得た。

(2) 第4層(図4)：洞奥部にわずかに残っていた第4層以下の発掘を深さ50cmほど進めた。第4b層の上部にあたる。かつての報告どおり炉跡や動物化石の集中部が層位的に検出された。炉跡周辺、特に洞窟壁側に動物化石が密集するパタンがみられた。動物骨の多くはおそらく意図的な破碎を受けていた。費消された食料の残滓なのだろう。

(3) 第5・6層(図5)：ソビエト時代に十分には調査されなかった洞口部の発掘もおこなった。現在の洞口部には東西5m、南北1-2mほどの巨石が鎮座している。洞窟底部の落石である。落下したのは第4b層期であ



図5 タグルアル洞窟第5・6層の発掘。



図6 タグルアル洞窟第6層出土のムステリアン石器。

ることがわかっているから、その下には第5層以下の文化層が残っているはずである。2025年度には現在の地表下2mほど掘り進めた。上部は大量の石灰岩礫を含んでおり、居住層にはみえなかった。おそらく、第5層～4b層前半、落石が頻出した時期にあたっているであろう。しかしながら、その下、第6層では多くの石器、動物骨を産出する土層が見つかった(図6)。それらは、現在、この洞窟では最古期の資料である。岩盤には到っていないから、次年度以降、さらに古い文化層が見つかる期待が高まった。

#### 4. おわりに

旧石器時代遺跡と言え、山沿いの洞窟で見つかりやすい。アゼルバイジャンにおいては小コーカサス山脈一帯が狙い所であるが、1991年のソビエト連邦崩壊以来、そこは隣国アルメニアとの領土係争地となったため、長らく調査が停滞していた。しかしながら、2020年以降の政情変化を受け、領土はアゼルバイジャン帰属と確定した。今後、次々に同地において新遺跡が見つかり、新知見が得られていくことであろう。

新資料を適切に解釈するには、既知の遺跡にかかわる情報を整理しておくことが欠かせない。タグラル洞窟は、アゼルバイジャン中期旧石器時代の理解に、間違いなく基盤を提供する。堆積物の大半が半世紀ほど前、十分な記録も残さず発掘されてしまったことは残念であるが、なお研究可能な堆積物が残されていることを私たちの再調査は示した。実際、ネアンデルタールの絶滅期(第3・2層)、かれらの広範な活動期(第4層)、南コーカサスへの到来期(第5層以下)といった我々の関心に直接関わる研究費料が回収されつつある。今後も調査を継続し、資料を現代的な分析技術を駆使して解析していきたい。

2025年度の調査は、日本学術振興会科学研究費特別推進研究「サピエンス数理先史学」(課題番号24H00001、研究代表者：西秋良宏)等によって実施した。

#### ■参考文献

- ・ Aliyeva, S. and Y. Nishiaki (2025) *Damjili Cave- A Hundred Thousand Years of History*, Gazakh, Azerbaijan. Tokyo: The University Museum, The University of Tokyo.
- ・ Jafarov, A. (1983) *Mousterian Culture of Azerbaijan -based on Materials from Taglar Cave*. Baku, Azerbaijan National Academy of Sciences.
- ・ Jafarov, A. (2017) *Paleolithic Camps in Karabakh*. Baku, Azerbaijan National Academy of Sciences.
- ・ Nishiaki, Y. (2025) A human history revealed at Damjili Cave, Gazakh, Azerbaijan. Conference on the *Damjili Cave - History, Archaeology and Culture: Presentation of New Publications*. Ministry of Culture, State Service for Protection, Development and Restoration of Cultural Heritage, and Avey State of Historical and Cultural Reserve. ADA University, Gazakh, August 9, 2025.
- ・ Nishiaki, Y., A. Zeynalov, and Y. Mammadov (2025a) *Damjili Cave - Investigating the Late Pleistocene to Holocene Human History in the Southern Caucasus*. Oxford, Oxbow Books.
- ・ Nishiaki, Y., A. Zeynalov and M. Mammadov (2025b) *Damjili, Dash Salakhly and Taglar Caves: Middle Paleolithic Research and Cultural Heritage in Azerbaijan*. The International Scientific and Practical Conference on *Protection of Prehistoric Human Settlements: Threats and Modern Approaches*, March 14-16, 2025. Baku, Azerbaijan.
- ・ Nishiaki, Y., A. Zeynalov and Y. Mammadov (2025c) Resumption of the excavations of the Middle Paleolithic Taglar Cave, Karabakh. *News of Baku State University, Humanitarian Sciences* 1: 33-39.
- ・ Nishiaki, Y., A. Zeynalov and M. Mammadov (2025d) The Middle Paleolithic lithic industry of Taglar Cave, Azerbaijan, in the South Caucasus. The 12th *Meeting of the Asian Paleolithic Association*. Sendai, June 20-24, 2025.
- ・ Zeynalov, A., Y. Nishiaki and Y. Mammadov (2025a) *Azykh and Taglar Caves in the Karabakh*. Baku: Ministry of Culture and Tourism, Azerbaijan.
- ・ Zeynalov, A., M. Mammadov and Y. Nishiaki (2025b) Middle Palaeolithic of Garabakh - new stage of studies (Joint Japanese-Azerbaijani expedition). THOCA seminar: *International research project: THOCA-Timing and Ecology of the Human Occupation of Central Asia*, November 3-5, 2025. Copenhagen, Denmark.
- ・ 西秋良宏 (2025)「コーカサス地方における初期人類展開の考古学的研究—アゼルバイジャン、アジフ洞窟出土資料を中心に」『三菱財団年次報告書』、公益財団法人三菱財団。https://mitsubishi-zaidan.yoshida-p.net/report\_list/2024/contents/pdf/2024202320018.pdf
- ・ 西秋良宏・アザド ゼイナロフ・ヤコブ ママドフ・ワギフ アサドフ・ウルビヤ サファロヴァ・新井才二・久米正吾・王媛・仲田大人 (2025)「南コーカサス地方のネアンデルタール人—アゼルバイジャン第15次発掘調査(2024年)」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』10-13頁 日本西アジア考古学会。